

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アテネより 〈便り〉
Author(s)	関本, 至
Citation	広大言語 , 7 : 75 - 77
Issue Date	1967-12-18
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046282
Right	
Relation	



ア テ ネ よ り

関 本 至

8月23日の夕方、羽田を発って、24日の午前にはイスタンブールに着き、そこに4泊の後、28日アテネに来ました。それからもう一ヶ月余りになり、その間アテネ大学やアカデミーやテッサロニケ大学、またギリシア各地の遺跡や博物館もあれこれ訪ねました。ギリシアでの生活にも漸く馴れかけて来たというところで、明日イタリアへ向います。「廣大言語」に何かの報告をする義務があると思うのですが、まとまったことを書く余裕が、気分的にも時間的にもありませんので、ほんの印象めいたことを少しばかり記して、つとめの一端を果すことにしましょう。

東京を出発する時、私の身体のコンディションは最悪といってもいいものでした。いろいろの用事を片づけて行こうと思うので無理をした上、直前に来客のおつき合い、それに暑さが重って下痢つき、やむなく絶食状態で羽田を出るときは、むしろ悲壮な気持ちでした。飛行機の食事はすばらしいと聞いていましたが、折角のパンアメリカンの御馳走もほとんど手をつけず（今にして思えば残念）、しかし紅茶とジュースだけは口にしましたが、そのパイナップルジュースのおいしかったこと、まさに甘露でした。カラチで夜が明け、丁度窓際に席があったので、イラン、イラクあたりの地上の景観が手に取るように見え、そのすさまじいばかりの眺めを吸いつけられるような思いで見下しました。ベイルートで1時間ほど休憩ののち、最後のコース、ベイルート-イスタンブール、これは地中海の東部、キプロス島の真上を飛び、小アジアに入り、緑色の水をたたえた大小さまざまの湖水を見下しつつ、現地時間の午前10時40分（実は東京時間の24日午後5時40分）イスタンブールの空港に着きました。東京を出発してから丁度24時間、狭い飛行機の坐席から解放されたときはほっとしました。

さきにも述べたような悪いコンディションで出発しましたので、ともかくホテルに入って休むこととし、そこでイスタンブールでの行動をいかにすべきか考えました。実はギリシア其他については多少もの予備知識を持って出たのですが、イスタンブールに関してはほとんど資料が入手できず、百科辞書で調べたことと、哲学の清水先生から頂いた一枚の地図が最大の頼りでした。しかしホテルで恰好の案内書（英文、しかるべきトルコ人の学者の手になるものらしい）を買い、これと地図をもとに、その日はベッドに寝ころんで作戦をたてました。2日目からは、その作戦に従って、観光バスなどは一切利用せず、自分で作ったスケジュールで、重点的に足でイスタン

ブルを体験することに決めました。

イスタンブールはマルマラ海にのぞみ、ボスポラス海峡を扼する景勝且つ要害の地です。しかもアジアとヨーロッパの交通の要衝でもあります。すでに西紀前3000年から人間が住んでいたことは最近の発掘でも明らかにされています。ギリシア人が植民するよりもずっと前からこの地には住民があつた——ということトルコ人は強調するようです。がともかく歴史の上では、最初トラキア人、フェニキア人といった民族がこの地に住みついたようです。西紀前660年にギリシアのメガラからビザスという王様がここに来てギリシア人の植民地王国を開き、それがビザンチンという名のおこりになるのだという言い伝えもあります。ともかく長くギリシア人の町であったこの土地に、西紀後330年ローマ皇帝コンスタンチヌスがローマから都をうつしました。「新しいローマ」とも呼ばれましたが、やがてローマ帝国は二分して、ここは東ローマ帝国の都となり、その間ゴート族、スラヴ族、十字軍兵士、などなどの侵襲を受け、ついには1453年5月29日、コンスタンチノブルはトルコの若いスルタン、メーメット2世の手によって攻略され、東ローマ帝国は滅び、爾来この町はトルコ人の町となったのです。

こうした歴史が、そのままこの町にあとを残しています。古いローマ時代の城壁、セントソフィア大寺院（近代ギリシア語的にアヤソフィアと言ひ——537年12月27日、その落城式当日、皇帝ユスチニアヌスは『おほソロモンよ、われは汝に勝った』と言ってその豪壮さを誇ったと言われていますが、全く驚くべき建物）、幾多の回教の大伽藍と林立するミナレ（尖塔）、スルトンの栄華のあとに目をみはらせる新旧の王宮、考古博物館とイスラム博物館の豊富な陳列、何とも言えぬ臭いのただようバザー。古代と中世と近代、東洋と西洋とがごったまぜになったこの町を何と形容したらいいか、ともかく実に面白い町だということになります。（大学訪問のこと、町の風景、食べものこと、乗り物のこと、記すことはいろいろとありますが省略します）。

何しろ前述の通りの悪い身体のコンドィションで、外国旅行の最初にいきなりこの風変わりな町、異臭立ちこめる（と私の感じた）町にとび込んだのですから、一方ではその面白さにひかれてあれも見、これも訪ねしながら、食慾の方は一向に進まず、ホテルの食事の一部をとったほか町中の食事はほとんど口にしませんでした。

こうして8月28日午前イスタンブールをたって、55分でアテネに着いた時には、救われたような気がしました。空港の設備其の他、イスタンブールとは格段のちがひ。やはりアテネはイスタンブールよりは遙かによりヨーロッパ的な町です。空港から都心へ入るバスの中で、アクロポリスのパルテノン神殿が目に入ったときには、さすがに感動しました。木のない岩山、ギリシア語、町の雑踏、すべて予期したものではありましたが、その中で生活してみると実感としての

ギリシアが漸に迫って来ます。

今日のギリシアについては、日本人の間での評判は必ずしもよくありません。変なボン引きが
いるとか、食事がまずいとか、大声で話すとか、油断ならないとか……しかし私がここで一ヶ月
余り経験したがギリシアでは、不快な思いというものはい度もなかったと言ってよいと思います。ホ
テルの従業員をはじめ、町の商人、大学の先生たち、すべて昔ながらの客もてなしのよい人々で
す。殊にギリシア語で（片言ではありますが）話しかけると、たちまち表情が変わり、笑顔を見せ
てくれます。数日前、同じ宿に泊り合せた千葉工業大学の先生（西欧を廻って来た人）もやはり
同じ感想を述べ、西欧の人たちは何か冷いところがあるが、ギリシア人は付き合い易いと言っ
ていました。ギリシアの悪口を言う人は悪いボン引きにでもひっかかった連中だろうなどと話し合
ったことです。なお日本商品の広告はあちこちに見られ、日本商品と日本人の評判は大変いいよ
うです。有能、勤勉な同胞に感謝したい——祖国を離れてみて今さらながらそんな感があります。

私は明日イタリアへたちます。これ以上書いている時間がなくなりましたので、ここで一まず
打ち切り、別の機会にギリシアのことをもっと詳しく書きたいと思います。西欧へ行って、私の上
述のギリシア観がどのように変わるか変わらないか、これは私自身にとっても興味ある点です。

（10月6日 アテネにて）

ソウル大学言語学科便り

今春、京都大学の言語学科博士課程に入学、直ちにSeoul大学の言語学科に三年間の計画で
留学された藤本幸夫氏から、同大学の言語学科について、詳細な紹介文がとどいた。わが国では
あまり知られていない、かの地の言語学の様子を知るために、よい機会と思われたので、氏の許
しを得て、ここに載せていただくことにする。（全文ほとんど原文のままである）

H B 生

ソウル大学言語学科についてお知らせします。まず大学をのべます。

① ソウル大学校は1947年に前京城大学から新しく発足しました。丁度10月15日で20
周年を迎え、今いろいろな行事が行われています。ソウル大学校は11個単科大学（文理科大学、
法科大学、工科大学、医科大学、農科大学、商科大学、歯科大学、師範大学、音楽大学、美術大